

蓮池 緋奈

中村地平は1947（昭和22）年5月、宮崎県立図書館（現：県立図書館）の第23代館長に就任し、10年間、作家館長として在任した。

地平が郷土文化を高めたいという気持ちから館長に就任し、日本一の図書館にしたいという抱負を掲げていた。ただ、当時館員は13人、予算は全国でも下位クラス。とても日本一にできるものかと笑われたが、「小さくとも特色をもって、個性的な図書館を作れば日本一になる」（注1）と考え、館員も大部分が20代、地平も当時39歳と全国的にも珍しく若さと情熱に溢れる図書館員の特徴を最大限に活かし、皆が一体となって地平の理想主義に共鳴して図書館を大きくしていった。

1950（昭和25）年、増築工事に着工したとき、県が増築工事費1,011万円とは別で予算化した250万円の図書充実費を活用し、地平は「花と繪の圖書館」を掲げ、重苦しい空気の図書館を明るく美しくしたいと考えた。当時、宮崎には美術館がなく、図書館が美術館の役割も果たしていきたいと地平の台北高校時代の恩師である塩月桃甫、大正画壇で知られた児島虎次郎氏、瑛九らの大作をはじめ、多くの作品を読書室に飾った。また、予算はもうなかったが読書に疲れた目には緑色がほしい、と職員の私費さえも投じて植木や草花の苗を植えた。

地平の在職10年間の業績はとても多く、日本十進分類法による図書館の整理、本の貸出だけでなくレコードコンサートや映画会、紙芝居などを多彩に開催する自動車文庫「やまびこ」の新設、基本図書の充実、増改築にともなう文化ホールの新設、貸出文庫・農村文庫の設置などきりが無い。

こうして図書館を全国的に知られるモデル図書館までに育て上げ、「静」から「動」の図書館へと変えた。そして、地平は自分の就任時の公約は全て成し遂げ、もうすることはないと1957（昭和32）年9月辞任し次のような言葉を残し図書館を去った。

あとは新しい人にやってもらうべきだ。理想主義に対する情熱を失いながら、現在の位置にとどまっているのは良心が許さない。それが辞任の内面的な原因です。人生は情熱ですからね。（注・1）

“過去は過去として葬らしめよ”というのが、ちかごろでの僕の持論である。僕にあるものは現在と、明日への情熱。」（注・2）

館長辞任の2年後の春、図書館は未曾有の大不幸に見舞われ、火事でホール、新館、旧館の順に全焼してしまった。多くの市民や学生が本などの運び出しを手伝い、蔵書の大半や貴重な古文書類は無事救出されたが、九州一と言われた2,200枚にも及ぶレコードライブラリーや塩月桃甫や児島虎次郎の大作など、数多くの美術品が焼失した。

人波を押し分けて図書館に駆けつけた地平は

『駄目だ。全焼だ。』と直感すると、間もなく、目頭はひとりでに熱いものでぬれてきた…人生で僕に興味があるのは、無からなにかをうみだすこと、未完なものを完成すること、ただそれだけにすぎぬ。…過去をふりかえるのをやめよ。前方に光をかかげてあゆめ
(注・3)

と記している。

作家からの館長、銀行家への転身やこの部分から地平の過去に固執せず現在、未来だけに向けて情熱を持って生きる人柄が伺える。過去によく囚われて引きずりがちな私には、地平の生き方は潔く本当に格好よく思えてくる。



引用文献

1. 宮崎県立図書館報「緑蔭通信第三十四号」緑蔭対談（1957年10月25日）
2. 宮崎県立図書館報「緑蔭通信第三十四号」館員諸君へ（1957年10月25日）
3. 連載企画／雲流れながれて『宮崎日日新聞』p. 11,（2008年3月26日）

参考文献

宮崎県立図書館報「緑蔭通信第三十四号」
宮崎県立図書館報「緑蔭通信第十号」
連載企画／雲流れながれて『宮崎日日新聞』p. 13（2008年3月19日）
連載企画／雲流れながれて『宮崎日日新聞』p. 11（2008年3月26日）
宮崎県立図書館、「図書館焼失と愛の献本運動」、宮崎県立図書館100年のあゆみ
<https://www.lib.pref.miyazaki.lg.jp/ayumi/kenpon/kenpon01.html>（参照2022. 9. 24）